2017 年 11 月　ヘルパー研修報告

日時　；2017 年 11 月 14 日(火)　9：30-11：30
場所　；北山ふれあいセンター研修室
参加者；ヘルパー28 名、職員 12 名

進行・柏原 / 記録・池垣

「発達障害ってなんだろう？」をテーマにし、前年度より引き続き、障がい者サポートセンタースマイルフレンズ　前野氏に講義を賜りました。

今回は事前に皆様から頂いたアンケートをもとに、自閉症の基本的な内容を聴講後、事例を元に、担当者会議形式でグループワークに挑みました。詳細は下記の通りです。

■自閉症の人と関わった時のイメージ

アンケートでも多数寄せられていましたが、実際に支援をしている側でも自閉症の方を分析すると、資料のようなイメージが思い浮かぶという結果です。

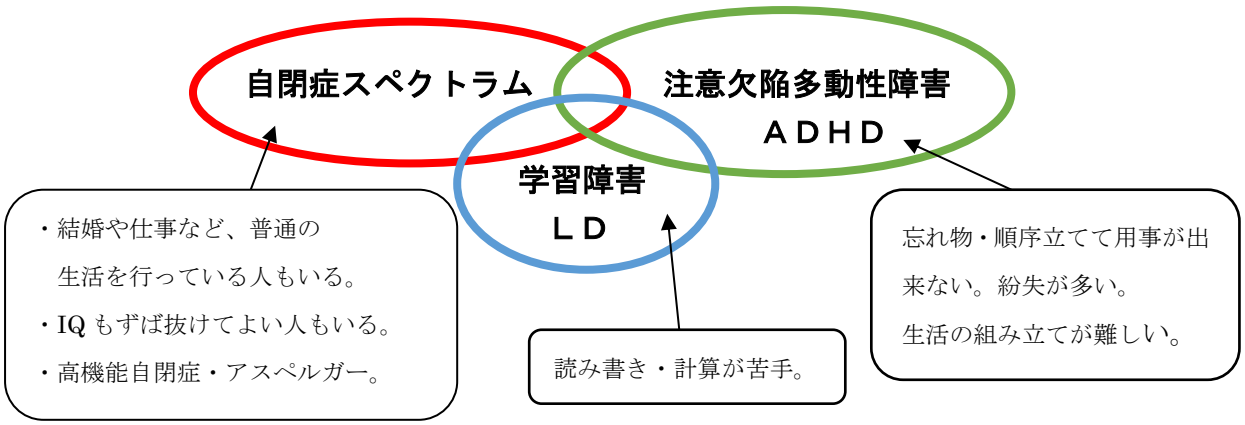
■なぜ、自閉症を理解することが難しいのか…。

別紙一覧を参照。その他の理由として、自閉症の場合、当事者の気持ちを疑似体験する手立てがないので、障がいについての想像が付かないことが周囲の理解を求めにくい。

例）車椅子なら試乗してみることで、当事者の恐怖感などが体感できるが
　　自閉症などは、それができない。

一人で理解しようとすることは難しい。そのために、担当者会議などを利用してチームでアプローチしていく必要がある。その中で、職員にはスーパーバイズ（サービス提供責任者が、援助者実践者を監督する・指導する等の意味）の責任があり、ヘルパーの悩みを引き出し、支える力が必要である。また、支援に対する指示なども出す役割をもっている。ヘルパー側は、自分だけで解決しようとするのでなく、悩みを共有することが大切。職員や担当ヘルパーと解決策を模索する必要がある。

■発達障害とは→大きなグループ名



※知的障害…IQテスト70以下が知的障害として療育手帳を取得する。
幼児期の発達診断で発達が遅いと判断されて、診断をするときに
IQテストで判明することがある。

現在、鷹峯・樫原居宅支援センターで支援をしている利用者は、知的障害+自閉症二つの障がいがあり、知的障害者療育手帳を所持している。
別に、自閉症のみの診断を受ける方がいる。IQは正常値だが、日常・社会生活などに支障をきたす状態となり、当事者・周囲がそのことに悩み判定をうけると、『自閉症』と診断されることがある。高機能自閉症（IQ高い・知的に遅れがない）やアスペルガーはこのような場合に診断名としてあげられる。

※但し、診断がおりる方は一握りで、本人に自覚症状がない・仕事が忙しくて判定へ行く時間がないなどの理由から、状態がわからないまま生活している人もいる。

※後者の場合、知的に障がいが無いので療育手帳は発行されない。変わりに精神障害者手帳が交付されることがある。発達障害者支援法が成立しているのだが、発達障害者手帳はない。

→上記を総称して、『自閉症スペクトラム』と呼ぶ。

■脳機能の障害（違い）

・親のしつけが悪いのではない。
・自閉症は中途障害ではなく、先天性障害。先にも記したが、判定を受けないまま日々の生活を送っている方もいる。
・発達障害は成長とともに症状なども変わる。
・正しい理解と適切な支援が絶対であり、その方たちにうまくあわせることが出来れば高い能力を発揮することがある。
・発達検査をすると、発達に伴う判定のグラフがボコボコとしており、突出してよい数値が出る項目とそうでない項目が見られる。

■イマジネーション（想像力）の障害…想像する力がない。

・想像する力がない場合、見えないものは守れない。知らない場所は不安が募る。
なので、電車内や静かな場所で大声を出しても、本人にとってはお構いなし。
支援者と当事者のずれが生じる。
・食べ物や行き先で、好きなことを連呼することがある。これは、実際それを「やりたい」だけでなく、本人のイメージにあるものを言葉で示すことがある。
この場合、別メニューの写真や文字（その人の能力に合わせる）を見せると、別のやりたいことを想像できることがある。
例）海外で食事注文をするときに英語でコミュニケーションが取れないときでも、写真のついたメニュー表があると、双方にとって伝えやすい環境となる。

■コミュニケーションの質的障害

・資料の通り。例えば、私たちの英語力と当事者の日本語力は同じようなもの。
中学単語程度の英語力で、流暢に会話を求められても理解できない・返答できない状態となる。コミュニケーションの質的障害がある場合も同様で、言葉の理解力が乏しいのに、支援者側の思いや支援中の計画変更を言葉で伝えても、理解できずにパニックになることがある。

→このような場合は、言葉を写真や文字で提示して、視覚支援を行う。

→時には、スマホなどで写真を見せることもある。

■その他の特性

・感覚に対して過敏であったり、逆に鈍感であったりする。

例）耳や視覚からの情報に敏感。

ガラスを割って、怪我の処置するときも麻酔をせずに縫合できるほど鈍感。

■なぜ『問題行動』が多いのか

・想像が出来ないので、場違いな行動を起こす。

・理解の仕方が違う。当事者と支援者の間に誤差が生まれる。

→不安・混乱・ストレスとなると問題行動を起こす。

これらは、当事者にとってはＳＯＳ。支援者にとっては問題行動。

水面上のものだけで問題行動と判断するのでなく、水面下のＳＯＳサインの部分にアプローチをかけないと行動の改善は望めない。

→一人で考えても名案は浮かばない。チームでアプローチをしていくことでよりよい案が出る。

＜ケース検討／別紙資料　Ａさん　19 歳のケースを検討＞

・演習のやり方

氷山モデル（別紙参照）を用いて、グループ内でＡさんの気になる行動などを出しあう。それを氷山モデルの水面下部分に記載する。ルールとして、議論はしない。

議論をすると話し合いがストップするので、思い当たることを積極的に出し合う。各班からでた意見は別紙氷山モデルのワークシート①②を参照。時間を制限し、活発に意見を交わすことで、様々な水面下の問題点が浮かび上がった。

（注：この利用者についての正式なアセスメントは提示していないので、意見のばらつきはある。）

困った行動・気になる行動の①・②が出たところで、A さんに対するアプローチの方法を検討する。検討するときは、①・②で出たことを踏まえて導き出す。
決して、検討した以外の導きをしない。（①・②の意味が無くなる）
結果、ワークシート③の通りの意見が出た。
→今回はグループワークとして、担当者会議の形式で意見交換を行った。
司会となる職員はサービス提供責任者の役割として、ヘルパーから意見を多く導き出す努力とそれを精査する力を養わなければいけない。
ヘルパー側は、自分が持っている意見を臆することなく出していくことが大切。
このとき、『チームで動く』ということを念頭に置く。
一人では解決できないことが、チームで話し合うことで多くの気付きを得る場となる。

・３班の発表
（気になる行動・困った行動の理由）
母との関係性・家族との関係性が悪いのでは・利用者がヘルパーによって対応を変えているのでは・薬の影響・家のスケジュールが無い・耳鳴りや幻聴もある？
ヘルパーとの場面で変化がみられたのは、人が多いことによる視覚的刺激があった。
外が嫌になった・見通しが立たなくなった。

（これらをもとに、アプローチ法を検討）
・ヘルパーの数を増やす。
・見通しを持てる、本人に合わせたスケジュールを作る。
・スタート場所を自宅以外にする。
・聴覚過敏の場合は、イヤーマフなどを使用する。
・体温調整が必要な場合は、その場の環境に応じて衣類や場所を設定する。

■まとめ

・困った行動・気になる行動の答えは本人が持っている。本人の行動をしっかりと観察して、意見を出し合うことで解決に導くことが出来る。
・今回の利用者に関しては、文字が読めるので行き先を提示すると問題行動が減ってきている。外出する際、本人の戻る場所をきちんと提示することが出来ていると安心して外出が出来る。→以前に受けた行為がトラウマとなっている可能性がある。
例）家に帰ると伝えてほかの場所へ連れて行く。その場所が嫌なところなら尚更。
一度失った信用は、取り戻すことは難しい。何度も自宅へ戻れるという安心感を得て頂くことで、少しずつ困った行動が減ってきた可能性もある。
・先ずは自閉症（発達障害）の方と我々との違いを理解する。そして、想像力を持てないことを理解する。これは車椅子利用者に歩けと言っているようなもの。
見えないものを見える形にする（文字・写真・スマホ利用など）ことも大切。

・担当者会議は大切。今回の研修を会議で活かしてもよい。職員はヘルパーから上がってきた意見をしっかり聞き取り精査する力が必要。そして、それについてアドバイスするという流れがヘルパーへの安心感や支援の向上に繋がる。
職員のみで解決するのでなく、他機関とも連携を取ってわからないことを学ぶ姿勢も大切である。
・それぞれが、それぞれのポジションを守る！これが一番大切。

研修報告より（一部を抜粋しています。）

・講師の説明がわかりやすく、意義のある研修となった。
・グループワークで色々意見がでてよかった。もっと時間が欲しかった。
・他人の意見を聞くことの大切さを学んだ。
・当事者の言語理解力は自分たちの英語力と同等というところにハッとした。
・「ハンバーグ」といつも連呼する利用者がいる。それは常に食べたいのだと認識していた。考え方を改めてみたい。
・見えないものを『見える化』する大切さを学んだ。実際にそうしていきたい。
・アセスメントが無い中で、沢山の意見が出て驚いた。

＜前野氏よりインフォメーション＞

☆西陣麦酒計画　～自閉症の人とともに西陣麦酒を醸造・販売するプロジェクト～
…自閉症の人は、心理発達の面で著しくメリハリが効いている人たちです。
自閉症の人への支援を天職と考えている私たちにとって、自閉症の人のメリではなく、そのハリを活かせる職場を作ることは重要な使命のひとつです。
そこで真っ先に浮かんだのはクラフト・ビール（地ビール）の醸造所です。
丁寧な温度管理、上質の味や香りの追及、ルーチンの反復作業などに自閉症の人のハリが活かせるはずです。京都西陣の地に西陣麦酒計画が呱々の声をあげ、2016年、歩み始めます。（※西陣麦酒計画　コンセプトより引用）
ビールは柚風味で美味しいですよ。
※ホームページ；http://nishijin-beer.com/

☆自閉症ｅサービス京都・滋賀
…京都・滋賀で自閉症支援に携わる機関・個人の横断的ネットワークの構築と、支援スキルの向上を目指す任意団体です。 一年を通して様々な講座やセミナーを開催しています。興味のある方はご参加ください。（※HP より引用）
※ホームページ；https://kyoto.jimdo.com/